小泉君は我等を送りて、濱邊に來つたが、更らに心機一轉して、仁科迄送ることとなり、相携へて下田から來つた汽船鶴丸に上つた。時に七月廿九日午前九時頃であつた。

十五　仁科村及び其の洞穴

子浦から落合、伊濱を過ぎ、波勝岬を超ゆ。此邊風浪高きも、景色は、昨日子浦より石室崎に至るに比すれば、寧ろ加ふるものがある。それより松崎港に立寄り、田子、安良里を過ぎ、宇久須に至れば、仁科村の諸有志は、既に小舟にて灣内に出迎へゐられた。

田子、安良里は、鈴木子順老師の郷里にて、老師は屢ば予に向て、其の山水の美を讃稱せられたが、今ぞ來り觀て、其の所聞に優るものあるを知つた。而して此の海岸からの富士の眺めは、亦た一層であつた。或人は赤人の詠じたる、田子の浦の富士とは、駿州のそれでなく、豆州のそれであると云うた。そは聊か手前味噌たるを免れざるも、右には危障、怪嵒が、幾千百年、太平洋の風濤と相ひ撲つて、其の惡戰苦鬪の名殘を留め、左には渺茫際なき駿河灣を望み、而して當面には、海を隔てゝ、雲外に富士の銀冠を仰ぐ。斯る光景は、駿州の田子浦にも無きところ、必らずしもそれと競爭する必要はあるまい。

我等は仁科の誇りなる堂が島の洞穴の見物に行つた。此邊の光景は、さながら松島の或る部分を移したるかの如く、小嶼、奇巖が、海中に星羅碁布してゐる。而して所謂る名物の洞穴は、天寶山下にあり。高さ一丈四五尺、洞長百餘間、洞中にて分岐して二洞、三洞となる。而して此中には海燕倏ち飛び、倏ち去り、其の巣、隨處にあり。若し之を採收せば、幾百人の支那料理燕巣の原料を、供給するに足る。我等が舟を此中に入るゝや、青年諸君は、洞中の水底に沒して、或は魚、或は蝦、或は鮑等、それ〴〵捕へ來つた。固より江の島邊の作爲的でなかつたことは、云ふ迄もない。其の獲物の中にても、蝦の如きは、其の長さ一尺に餘

るものがあつた。

我等は洞穴盡くる所に上陸し、有名なる搖橋を渡り、藥師堂に詣し、先づ堂前の突き井戸より溢れ來る清泉にて顏を洗ひ、茗を啜り、襟を披いて凉風を存分に受けた。

此れから更らに仁科村の海水浴場に至り、此處にて仁科村の諸有志と與に、午餐の馳走に預つた。此の浴場は、土地出身の東京神田の大常盤主人佐野君が、寄附したものと云ふ。とりたての鮑など、別して甘きを覺えた。

それから附近の白巖窟の佛像を觀た。此れは洞窟を穿ち、其の壁に藥師、觀音、文珠、普賢、彌勒等の諸像を彫りてゐる。而して其上に白岩山の三字が、刻まれてある。

此れは弘法大師の作と云ふが、果して然るや否やを知らず。此所は四條天皇天福元年に、白岩山天福寺を建てたる地だと云ふ。或は宋人陳和卿の作ではあるまいかと云ふ說がある。何れにもせよ、其の手法は、寧ろ支那式らしくある。

此處から小泉三申君、及び子浦よりの一行と別れ、我等は佐野仁科村長、山本前村長、勝呂土肥村長及び小泉君を代表して、我等一行の世話役たる鈴木信一君等と、石油發動機船にて、土肥に向て去つた。

十六　土肥溫泉

海上は風生じたれども、愉快であつた。土肥に著し、直ちに明治館別館に投じた。此れは勝呂村長の經營する所だ。

豆州の西岸では、唯だ土肥が溫泉地だ。而して同時に土肥は鑛業地だ。乃ち猫越、達磨兩火山の境界に造られたる村落にて、恰も其の裾合谷の如き位置を占め、北東南は、兩火山の支脈延び來り、唯だ西の一面、駿河灣に向て開いてゐる。今日のところ、六里を距てたる仁科との間さへも、自動車交通不可能であり、又た湯ケ島や、修善寺との交通も不便で、唯だ海路のみなれば、一たび暴風波の際は、

土肥は殆んど孤立の情態だ。

我等の目に附たのは、海邊に突起したる大烟突から、黑烟を噴き出す光景だ。此れは附近の金山から鑛石を持ち來り、分析する所だと云ふ。尙ほ毎月數回、千噸級の汽船が、鑛石を、伊豫なる住友製煉所に運搬す可く、來港すと云ふ。

我等は自動車にて、附近を見物した。稻田も少くない、山には蜜柑畑がある。竹が多くある。小川の水は淸くある、水車が廻つてゐる。時に驟雨來つた。土肥神社に詣した。此邊巨樟林立してゐる。

金山は、天正五年以來、五十年間盛んに採掘したと云ふ。今日でも四五十萬圓の價格のものを出す由。而して其の區域は、溫泉區域と相ひ對してゐる。要するに一方の地中から、溫泉が湧き、他方の地中からは、黃金が湧く。此れだけでも土肥は惠まれたる地と云はねばならぬ。

同夕は土地の諸有志と會食した。然も一切アルコール拔だ。況んや獻酬をやだ。夜中大驟雨、而して風頗る强し。我等は此れが爲めに、豫定の計畫を變更するに餘儀なからしめた。

豫定の計畫とは、三十日早朝、石油發動機船にて、戸田を經、三津に上陸し、それから自動車にて靜浦を過ぎ、沼津に至るつもりであつた。

三十日の朝は雨は息んだ、風もほゞ和いだ。されど海上は荒れてゐる。とても發動機船を出航せしむ可きでないとの事なれば、兎も角も松崎から寄港の汽船通運丸に乘つた。此れは百噸にて三十年餘の老朽船だ。東京灣汽船會社の所有船中、最小最舊、而して恐らくは最惡の一であらう。併し船は左程にも動搖しなかつた。

我等は富士山に向つて前進した。而して戸田を眺めて去つた。大瀨崎を廻れば、海面は平らかになつた。大瀨崎には先年沼津から航遊したるとがあつた。船は狩野川を溯りて、沼津に到著したのは、十時過ぎであつた。而して土肥から我等を見送つた助役の勝呂義進君と、相別れた。

十七　沼津より大森

沼津から三島に赴き、竹葉にて午餐を喫し、此處にて山下君、大橋君、望月君等と會食した。勿論鈴木君が小泉君を代表して、我等の案内役だ。

我等は午餐前に、李王の御別邸を拜觀した。此れは故小松宮殿下の經營し給うた所にして、園の廣袤は幾萬坪であるかを知らぬが、三島を潤す一切の水源の、七分迄は、此の園内より湧き出すものらしい。其の泉の滾々として湧き出づる樣は、熊本名物の水前寺以上であらう。とても清冽だ。

正直に申せば、園は半は荒廢してゐる。されど其の清泉は舊時の清を改めずにゐる。魚は圉々焉として、水中に游泳してゐる。無數の鷺は、林中に鷺王國を作りて、我物顔に園の一半を占領してゐる。山百合の花は今を盛りに咲いてゐる、若しくは盛りを過ぎてゐる。

我等は更らに龍澤寺を訪うた。途中から車を棄てゝ歩したが、上照下蒸、眞に汗は珠の如くであつた。龍澤寺の山門を喘ぎつゝ上り、漸く方丈に到り、先づ清水を喫し、それから白隱、東嶺、遂翁等の書畫を拜觀した。而して白隱、東嶺等の木像の前に、燒香した。白隱和尚の像は、何となく晩年の海舟先生を、聯想せしめた。

龍澤寺は多年往訪を期して、漸く其志を達した。然も暑氣には實に閉口した。沼津停車場に至れば、池谷觀海翁、及び我社の恒川、八田の諸君、及び稻玉君や、沼津市長の代理者等在つた。

斯くて諸君に別れ、特急に乘れば、車中に川原茂輔君が在つた。互ひに久濶を叙し、七月卅日午後八時過ぎに、大森草堂に還つた。

此行七月廿六日早朝發し、同卅日夜還る。其の經過する所、伊豆の一國、然も未だ全たしと云ふ程ではなかつた。されど東道主人小泉君の好意にて、斯る短日子に、見る可きものを見、特に見んと欲するものを見た。感謝曷んぞ勝へん。但だ

往來急遽、遂ひに一詩の以て山靈水神に酬ゆるものがない。

要するに伊豆は石を骨とし、山を肉とし、海を衣とす。其の山水の奇、固より當然だ。而して自然の利は、云ふも更らに、地中の溫泉、鑛物の類、勝げて數ふ可らず。若し夫れ深山大澤、實に龍蛇を生ずるもの、今後に俟つあらむ。

二日の小遊

一　湯河原瞥見

熱海も東京から三時間以内にて、行けるとなつた。汽車開通して、客に推寄せられ、幾百年來、お客商賣の熱海町民諸君も、一時は面喰つた次第である。今やお客收容力も、追々と擴大せられ、諸事圓滿に運ばれつゝありと云ふ。

予等は過般伊豆一周の際、一寸熱海ホテルの門前迄音信れ、如何にも其の風光の愛す可きを見、是非一遊いたしたしと考へ、幸ひ小閑を偸み、十月三日一泊がけにて出掛けた。昨夕迄は陰雲天地を包み、不愉快千萬であつたが、三日の朝はからりと霽れ、秋晴の好日となつた。同行二人、老妻と予。

小田原迄熱海ホテルの專務岸君やら、舊知齋藤君やら、其他の有志諸君の來るあり、而して湯河原に下車した。湯河原は予に取りては思出多き所だ。大正八年には、四月から六月にかけて滯在し、大正九年には、一月から三月にかけて滯在した。予の大患を醫したるは、林病院長であるが、豫後の始末は、湯河原がつけて呉れた。『大戰後の世界と日本』などの著作も、此地の產物だ。されば何かにつけて、湯河原を想起する。

湯河原停車場は門川にある。小學校も新築せられてゐる。予は曾て小學校を參觀し、其の建築の餘りに危險あるを見て、警告した。當時は改築位地の問題にて、行き惱んでゐた。今や立派なる小學校が出來てゐる。

汽車の開通にて、浴客は勿論、湯河原自身も、其の恩惠を享けてゐるであらう。

天野屋に立ち寄れば、客室と云ひ、浴室と云ひ、新築やら、改造やらで、面目を一新してゐる。殊に大廣間なども出來て、長岡外史翁が大筆を揮うてゐる。

若し遊覽道路が出來、廣川原を過ぎて、箱根まで自動車にて行けるとならば、更らに湯河原の奥が洞開して、一段の便宜を加ふるとなるであらう。予は先年湯河原を去るに臨み、天野屋主人に、河の清潔法に就て注意した。河を以て塵芥捨場となすの、不都合は云ふ迄もなく、それ程でない迄も、道路の掃除には氣が付くも、河床の掃除を閑却するは、美觀を損するばかりでなく、衞生にも害ある可しと云うた。今ま來り觀れば、前に比して幾分清潔を加へた樣にも思はるゝ。

二　熱海

熱海ホテルに著すれば、熱海町の諸有志迎へられ、相共に午餐の卓を與にした。予は諸君に向て、熱海は地の利を占め、且つ歷史的優越の位を持つてゐる。將來伊豆半島は、日本の大公園とも云ふ可き發展を遂ぐるに際して、其の尤も便宜を享くるは熱海だ。熱海は東京から伊豆に入る關門であり、上方から伊豆を拔ける出口である。何れにしても往くも還るも、此の關門を通過せねばならぬ。斯る地の利を占めて、お客を取り逃すは、餘程のヘマを爲さねば能はぬとであらう。伊東其他の繁昌は、熱海に取りて仕合であり、決して不幸ではない。伊豆の何れの地方が發展したとて、決して熱海の衰ふる理由とはならない。若し萬一さるとあらば、そは熱海人士の自らか招く所である。

特に熱海は昔からの湯治場にして、又た避寒地としては、恐らくは伊豆の何れの地よりも、溫暖である。且つ坪内逍遙翁の如き文豪を、熱海が其の町民――寄留者とは云へ――の一に數ふるを得るは、此上なき仕合だ。但だ今後千客萬來に際して其の收容力を、彌よ增加することゝ、其日還りの客でも、丁寧懇切に取扱ふとだなどと、卓上でちと講釋めきたことを、喋舌つた。

食後庭に出づれば、如何にも好個の風光だ。思うたより以上だ。西北は屏風の如

く、丘陵を負ひ、東南に向うて開いてゐる。眼前に初島、更らに遠くして大島の三原山の噴烟が、幽かに臨りつゝあるを見る。左顧すれば眞鶴岬から、三浦半島、房總一帶の遙青は、水天一髮の間に在り。右顧すれば魚見岬、網代、伊東、日蓮岬、所謂る伊東不二の小室山・天城一帶悉く眼中にあり。而して長き廊下を降りて浴室に入れば、浴槽に坐して、海光を賞するとが出來る。

前庭の芝生の傾斜面を降り盡くせば、其處にはプールがある。其下は斷崖にて、巨石磊々として堆をなし、波濤は日夜に鼕々として來り拍つ。

敢て熱海ホテルの提燈を持つではないが、若し熱海が避寒地とすれば、此のホテルは避寒地中の避寒地とせねばなるまい。ホテルは曾て日露交渉の開始所として、露國大立物ヨフェー氏の投宿所として、既に世間に廣告せられてゐる。今更ら予が呶々を費す迄もない。されど其の風光の尤も佳にして、展望の尤も開濶なるは、恐らくは熱海中、他に比類無しと云はざるも、少いであらう。予は此文を艸しつつ、今や一點の金烏、海心より上らんとするを眺めてゐる。

（大正十五年十月三日午前六時、熱海ホテルにて。）

三　初島

午後は岸君の案内にて自動艇にて初島に遊ぶとした。岸夫人、齋藤君其他二三の諸君。齋藤君は、予が明治二十六年の春、熱海に遊び、小學校を參觀したる際の小學校先生だ。韓退之は『樽酒相逢十載後、君爲ニ壯夫一吾白首』と云うたが、我等は三十三年の後に相見、互ひに其の形容の變じたるに驚くばかりだ。

予は當時中濱萬次郎翁と共に、初島に遊んだとを記憶す。萬次郎翁は、日本開國史に少くとも其名を記せらる可き一人だ。今更らながら、其人と共に遊んだことを想起して、如何に予も亦た舊新兩世界の間に跨りて、生れ出でたる幸福を、感謝する。

自動艇は波を切り駛る。三里の海上、四十分にて達した。此島には昔から四十三

戸を限りとしてゐる。水仙と文珠蘭の產地だ。前遊の際は滿地皆な水仙であつた。當時井は唯一であつたが、今や別に二個を鑿ち、唧筒にて汲み上げてゐる。島の改善以て知る可しだ。

區長の橋本君案內し、小學校やら、お寺やら、墓地やらを見た。お寺の庭には、不揃ではあるが、鎌倉時代から足利時代にかけての、五輪塔やら、寶篋印塔があつた。過日揃うたる一個を、熱海久邇宮殿下の御別邸に、奉獻したと、橋本君は語つて。又た鳥居博士が一週間ばかり滯在し、先住人の遺物、石礎其他を採集したと語つた。

還りには初島を一周し、錦浦邊から魚見岬を廻り、薄暮熱海橫磯に著岸した。近比珍らしき大凪であつたが、但だ熱海方面は、雨雲に包まれてゐた。初島では晴天の中に、雨が一二點降つたのみだ。

我等は岸君の先導にて、間道を通つたが、此方は夕立後らしく、道が潤ふのみならず、或る場所は泥濘であつた。暗中摸索とは此事であらう。然も時々電光にて、漸く足元が判つた。古人の句に『乍從二電影一認二前村一』とありて、餘りに詩人の造句が、作爲に過ぎたるを疑うたが。今ま實驗して、その實境であるとを確かめた。

ホテルに歸著するや否や、大雨沛然、雷鳴轟々、眞に間一髮と云ふところであつた。今更らながら我等の幸運を悅びつゝ、晩餐後一浴して、脚を伸ばして、安眠した。

四　日金山　十國峠

十月三日、昨夜の大雷雨は、何時の間にや霽れて、一望江山拭ふが如し。晴を喜ぶ禽鳥は、頻りに近傍の樹枝に囀る。

初島如二嬌女一。婀娜堆二翠髻一。大島似二猛士一。熖烟衝二天闕一。
相海如レ眠豆山笑。別有二天地一非二人間一。

此れが眼前の光景で而して此の光景を、朗々として、開豁なる浴槽の中から消受するの清福は、とても華清宮の溫柔郷を獨占したる玄宗皇帝でも、覺束なからう。

午前には溫泉旅館古屋なる內田君を訪ひ、其の清快樓に上つた。內田君は故三浦觀樹翁の碁相手にて、其の楣間、床上、何れも皆な觀樹老人の書のみだ。予はつく〳〵之を眺め、主人に向て、御身は定めし三浦さんに、態と負けたであらうと云へば、主人は頭を搔いて笑つた。

濱邊では町の諸有志の催しにて、網引があつた。大漁と云ふ程ではなかつたが、鰯、鯵、せいご、小鮫、比目魚、ほうぼう、鱚、其他大樽六七合目を充たした。

此れから自動車で、十國峠に上つた。明治二十六年三月十二日には、病餘の痩軀を、竹輿に搖られて上つたが、今度は自動車道路が、三島に通ずるを利用した。愈よ峠と、日金地藏堂の分岐路にて、自動車を捨て、芝山を傳うて上つた。小春の天氣、そよ〳〵と海上より吹き渡る風を、滿面に受けて、何とも言明し難き愉快の心地がした。

途中には馬が三々五々、草を喰うてゐた。如何にも長閑なる風情だ。頂上には前遊の時には、『手を出せば、届きさうなり雪の富士』の句碑があつたが、今は何人の惡戯にや、溪谷に推し墜したと云ふことだ。途中の丁數標記の石地藏達も、それ〳〵手傷を負ひ、若しくは紛失してゐる。而して頂上の辨當殼や、紙屑の狼藉たる、天地清淑の氣を混濁せしめ、乾坤清淨界を瀆穢す、實に言語道斷の沙汰だ。

併し斯く憤慨するものゝ、其の眼界は十國五島と申すが、果してそれ程であるや否やは、未だ確めないが、實に愉快なる眺望であつた。富士山も、全くとは云はぬが、其の頂上と、其の半腹以下は、露出した。歸途には日金山の地藏堂に詣し、三十三年振りに、地藏堂の閻魔大君と、生死河婆大姐の石像に面會し、久濶の情を叙した。

予は此の機會に於て、十國峠を横ぎりて、箱根に至る自動車道路修造の急務を一言したい。此邊は嶺傳ひにて、勾配も左程急でなく、容易に現在の人道を、その儘擴大にし、若しくは改鑿すれば、其の目的を達し得るであらう。今日でも三島への自動車道路出來、沼津、熱海間は、直徑的連絡が出來てゐる。此上箱根との連絡が出來れば、唯だ内地人の便宜のみでなく、世界の觀光客の爲めにも、至極の好都合であらう。

五　熱海餘言

午後は伊豆山に詣した。八百餘級の石段には、聊か閉口しないともなかつた。然も老妻及び岸夫人も同行したれば、その手前元氣を出さゞるを得なかつた。

伊豆山に就ては、三十三年以前、詳かに書いてあるから、今回は略しておく。當時周圍四尺の榊樹と記したのは、榊でなく、竹柏樹だ。それだけ訂正しておく。奈良の春日神社にも、巨大なる竹柏樹が若干ある。熱海木宮にもある。

予は伊豆山神社の荒涼たる狀を見て、坐ろに賴朝、政子、實朝の往時を懷うた。之を名所とするには、今少しく名所らしき取扱をする必要はあるまい乎。

此れより竹内龍雄君の經營する、桃山新別莊分割地を一見した。竹内君は、大森の住人にて、其邸山王草堂と相距る一牛鳴地だ。然も相知らず、偶然ホテルにて相見た。君は熱海停車場を挾み、其の兩側に無慮三萬幾千坪を開拓し、今や水道、下水、溫泉、その他の設備、殆んど成り、頻りに其の地區を、各希望者に分割中と云ふ。桃山の名は、坪内逍遙翁の命ずる所と聞く。

予等は終日遊び暮らし、午後五時三十分の汽車にて熱海を辭し、九時前大森に還つた。先づ三時間と見れば、間違ない。若し此れが二時間となれば、更らに便利であらう。小田原急電開通の上は、決して期し難きことではあるまい。

予は尙ほ熱海に就て、物語らんとて、明治二十六年三月、予の記したる『熱海たより』を、只今架上より抽き來りて一讀すれば、我ながら能くも書きたりと云ふ

可き程に、書いてゐる。最早蛇足の添ふ可きものがない。但だ當時『重ねて熱海盛運記を記し可レ申』と豫言したことの、今更ら適中したるに驚く。

熱海は東海道鐵道開通以前に大繁昌し、以後に聊か其の繁昌を、大磯、鎌倉、其他に奪はれ。而して昨年熱海線開通の爲めに、更らに積水を一時に決するの勢を以て、繁昌を恢復しつゝあり。此上は如何にして此の繁昌を、永久に保持し、且つ擴充す可きかゞ、問題であらう。曰く厚待衆客。

此行石渡町長、内野、新磯の二助役、其他内田君、露木君、野田君、中田君、土谷君、神保君、芹澤君、及び石垣署長、小林郵便局長等の好意に浴することを多かつた。特に熱海ホテル專務岸衞君、及び令夫人と、三十三年前予が齋藤訓導と『熱海たより』に記したる、齋藤要八君には、銘謝す可き理由が多くある。而して齋藤君は、予と同甲である。

熱海の一日

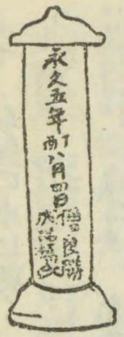
一　伊豆山の發掘物

昭和二年四月廿四日午前五時、飄然大森山王草堂を發した。熱海ホテル食堂に入りて、朝餐の卓に就く、寧ろ先登者であつた。滯在の客は、後から〳〵と入り來つた。

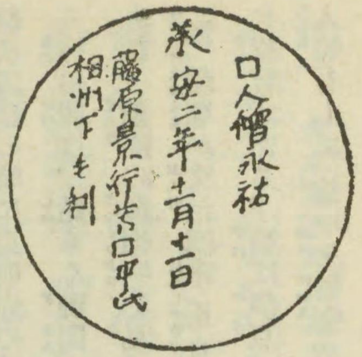
岸君夫婦と相拉へ、熱海町から錦浦に出掛けた。險崖を下り、岬の巖角に備へたる、古寢臺の廢物利用的腰掛に掛りつゝ、澁茶を呑み、草餅を頰張らんとする刹那、腰掛は毀れて尻餅を撞いた。それから赤根園に赴いた。此處からの眺めは、更らに妙だ。初島も、網代も、眞鶴岬から、伊東富士まで、指顧の中にある。而して鰤網を引き揚げつゝある漁舟の掛聲は、岸に碎くる濤聲に混りて、勇ましく海上から轟いて來る。

ホテルに歸り、伊豆山神社宮司北山君の携來れる、鏡、經筒、瓶等を見る。右は伊豆山神社本殿裏山六十尺の斷崖から、最近に掘出したるものと云ふ。然もそは極めて最近である。

經筒は十五個、その中一箇は高さ六寸、胴廻九寸八分、からかね製鑄物にて、屋根付だ。而してその中には、白紙墨書經を入れてあつたが、外氣に觸れて、ぼろぼろとなつた。而して其の經筒の面には、左の文字があつた。



永久五年は鳥羽天皇の御代にて、平安朝の末期だ。昭和二年を去る八百十年だ。而して此の經筒は瓶中に入れ、瓶の中には、朱が一杯つめてあつたと云ふ。其瓶は素燒の土器にて、硬きこと石の如くある。高一尺一寸三分、腹部廻り三尺五寸二分、口徑五寸、底徑四寸三分。而して其の腹部に双眼の如く、二個の小穴を穿つてある。此は何の爲めであつた乎。



又た鏡が一面ある。徑三寸四分五厘、ふち高二分、而して其の鏡面には極めて薄く細く、上の文字が彫られてある。

承安二年は高倉天皇の御代にて、平清盛全盛の時節だ。永久五年を距る五十五年の後だ。□人は、士人と讀まれ、芳□は、芳孫と讀まるゝ樣だが、明白でないから疑を闕くこととして。而して鏡の裏面は、鳥網双鳥の模樣で、如何にも平安朝式の優美、典雅の特色を發揮してゐた。其他の經筒には、別に徵す可き文字は無つた。

二　伊豆山の社格

今更ら改めて申す必要はないが、伊豆山神社は、伊豆に於ては三島、箱根と共に、古來から最と崇貴なる神社の一であつた。源頼朝の流竄中は、別けて箱根と伊

豆山との兩神社を信じて、其の源家復興を祈つたことは、舊記にも特筆せられてゐる程だ。

傳說には仁德天皇の朝、松葉仙人ありて、初めて忍穗耳尊を奉祀したと云ふ。松葉仙人とは、松葉を服して生存したる者。現在にても半成的松葉仙人――卽ち日々若干の松葉を服する――連中は、少くない。予の知る所でも、八代大將、田中善立、松田源治の諸君は、其の仲間だ。

欽明天皇の時に東明寺の勅額を賜ひ、敏達天皇の時に走湯權現の勅號を賜はりたる抔の說は、姑らく疑問とするも。平安朝の比には、立派なる伽藍が聳えたることは、前記の發掘物を見ても、想像がつく。

源賴朝が文治四年正月、伊豆山參詣は、頗る大[illegible]けであつたことは、東鑑に揭げてある。彼は伊豆、箱根、三島參詣の爲めに、甲斐、伊豆、駿河等の御家人等をして、途中を警衞せしめた。實朝が參詣して吟じたる和歌四首は、玉葉和歌集や、夫木和歌集に見えてゐる。

德川家康が、關東の主となるや、文祿三年には二百石を寄附し、慶長十四年には更らに百石を加增した。而して寛文七年、幕府は執政稻葉正則に命して社殿を修營せしめ、元祿十一年、更らに執政大久保忠朝に命じて修補せしめた。

然るに維新以來、殆んど荒廢し。今は社格は漸く縣社として存立してゐる。如何にも情けなき次第と云はねばならぬ。せめて國幣社には昇格せらる可きが當然であらう。予は神社其物に對して、斯く云ふのみならず、伊豆が日本の事實上、國立大公園である立場からして、斯る古來靈驗多き舊社は、歷史保存の意味にて、大切に保存ありたしと思ふ。土地の人々は勿論、都人士の熱海、伊豆方面に在る諸君の一考を煩はしたし。

伊豆山上宮の鐘は、北條氏康が軍用の爲めに、之を鑄潰したる由にて、彼は相州鎌倉淨智寺の鐘を、其の代用として寄進した。其鐘は正慶元年淸拙和尙の銘を

刻したるもの、正慶元年は卽ち元弘二年だ。而して氏康の寄進年號は、天文十九年五月十八日附である。

尙ほ伊豆山下宮には、元德三年卽ち元弘元年の製文、明德三年書レ之の鐘があつた。知らず兩宮の二鐘、今尙ほ存する乎、否乎。遂ひに訪尋に暇なかつた。

午後から岸君夫婦、齋藤翁、北山宮司等と日金山に赴き、十國峠に登つた。途中の山間には、大島櫻が咲いてゐた。老鶯の聲を聽きつゝ登つた。餘りに好天氣の爲めに、空が霞んで富士は見えなかつた。

峠を下り、諸君は熱海に、予は輕井澤を經て三島に至り、沼津に達したるは、特急の發する前二十分であつた。斯くてそれに搭じ、車中乘り合せたる本鄕大將等と相語り、午後八時半には山王草堂に歸著した。一日の散步としては、隨分遠征であつた。

長興山莊遊記

一　長興山莊

豫て小室翠雲畫伯から、箱根なる長興山莊の勝を聞き、幾度か神飛び魂馳せた。偶ま來る十四日、大久保甲東五十年祭講演の事あり、乃ち其の下た調を兼ね、赴くこととした。携ふる所、甲東日記二冊。

予は翠雲畫伯に、其の不在を時として見舞はんことを約束した。卽ち別莊の明巢狙ひだ。時維れ昭和二年四月卅日、綠陰幽草勝ニ花時一の節、小田原から三枚橋を過ぎ、湯本に至り、甲川を渡り、更らに須雲川を渡り、川に沿うて、溯る數步、小隧道あり、題して歸雲洞と云ふ。翠雲畫伯の筆。洞を出づる修竹數竿、須雲川を前にし、箱根舊街道の斷崖を背にす。此れが長興山莊だ。川を隔てゝ岩崎家、今村家の諸莊と相對す。如何にも人烟に近くして、然も仙鄕の趣きがある。

我等は門を入るや、先づ庭内を逍遙した。何よりも有り難きは、清水の豐富なることだ。流れて渠となり、渟りて池となり、懸りて瀑布となる。聞けば別に懸崖から白糸の如き瀑布があつたが、大正十二年九月一日の震災に崖壞れて、今は只だ岩清水の湧く所に、その名殘を留めたと云ふ。

庭は隨處に箱根山中の野生なる射干が花を開いてゐる。轉じて中庭に至れば、牡丹が滿開だ。流石に翠雲畫伯の嗜みだけありて、餘りに人工を用ひてない。自然の儘にして、然も自然の美を助成したるもの。但だ斷崖崩壞の痕、今尙ほ新たなるは、天災地變、致し方なし。徐ろに時間をして、之を修補せしむるの外はあるまい。

從前から須雲川の右岸には、到底溫泉無きものと諦められてゐた。然るに大正十四年の夏秋の交、翠雲畫伯が、試掘せしめたるに、三十餘間にして乍ち溫泉を得た。然も其の熱度は百二十度、一分間に一石三斗の量ありと云ふ。我等は試みに其の泉源を見るに、滾々として湧き出でつゝあり。然も殆んど手を爛さんばかりの熱度がある。斯くて長興山莊主人は偶然にも、溫泉成金となつた。

聞說く君は中庭の老大なる櫻樹を伐り、其跡を指定して鑿たしめた。畫伯が櫻樹を伐るなどは、聊か殺風景だが、然も君は徹宵揮毫の餘、早曉中庭を逍遙するに、何やらん湯氣の立ち上るが如き感をなしたるが爲めに、此處を指定したるに、果然其の目的を達した。君は爲めに櫻樹を弔ふの文を作つた。櫻樹靈あらば、其の身代りに、靈泉を供給したるを悅ぶであらう。翠雲畫伯が、之を不老泉と命名したる、亦た所以ある哉。

乃ち入室、喫茶、直ちに一浴す。泉熱して冷水を和す。澄清鏡の如し。凡有る塵垢を洗ひ淨めた。午餐の卓上には、珍らしくも木の芽田樂があつた。食後直ちに一睡す。

王荆公が午睡を愛好したるは、曾て聞いた。予がトルストイ翁を訪ふや、翁亦た

午餐の後、姑らく失敬とて、午睡した。前人を味方とするではないが、予も亦た午睡黨だ。但だ震災以來、正午は宛も出社の刻限にて、致方なかつたが、今日と云ふ今日は、存分に此の愉快を消受した。（昭和二年五月初一午前五時四十分、朝禽庭樹に囀し、泉聲階除を遶るの處に於て。）

二　午後の散策

午睡醒め來れば、既に三時を過ぐ。四時頃から山莊の留守居を案内者として、玉垂の瀧を見る。東道の中川黄山君は此から辭して歸京した。我等は須雲川の河岸を傳うて溯つた。

黄山君の去るや、予は一首を口占して、莊主翠雲畫伯に贈つた。

筆底雲烟恒有春。　天眞發處自清新。
洞天不用鍊丹術。　不老泉中不老人。

是れ畫伯の向上精進の意氣を、祝福するの微意のみ。

震災は殆んど函根一帶の地を、破壞し去らんとした。滿目の青山を、殆んど滿目の赭山たらしめんとした。今や新樹蒼々、蓮山の草木眞香を吐くの際、隨處に老人の禿頭の如く、斑痕を見るは、何たる慘事であらう。石轉び、木顚れ、崖劈け、川床埋まる。斯る際に豪雨一番、如何なる砂防工事も、乍ち破壞せらる。函根の恢復は、とても人工のみにては致方がない。更らに時の力を入用とする。

我等は溯りて觀音阪に至つた。此處は箱根の舊道その儘にして、不規則なる石疊が存してゐる。今は廢道となつてゐる。予少年の際には、足駄にて、此の險阪を上下したことを記憶してゐる。松陰先生や、賴古狂生なども、無窮の恨を呑みつゝ、籃輿にて經過したのであらう。

阪を上りて改造せられたる箱根街道に出で、下りて臺茶屋を過ぎ、曾我堂を見、早雲寺に至つた。此の附邊の人家、何れも箱根細工を生業としてゐる。而して街道には――東海道五十三驛を通じて、最も巨大なる――老松がある。既に其の若

干は伐られた、而して其の或者は立木のまゝ枯れたるものがある。今日に於て斯る老松は國寶である。又た國寶であらねばならぬ。何とか之を愛護したきもの。

予には彼等が宛も生きた歴史其物の感がある。

早雲寺は案外、場所柄としては俗化してゐない。此處は殆んど一切か、震災から恢復せられてゐる。我等は老大なる槇、及び椎樹の邊に小田原北條五代の墓を弔し、低徊去る能はなかつた。

長興山莊の一夕は、靜寂であつた。予は甲東日記を讀んだ。日記は極めて乾燥、無味、殆んど甲東の自己の備忘錄に止まつてゐる。されど心ある者が之を讀めば、其の簡單なる文句中に、絶大の獲物がある。卽ち不用心の中に、甲東其人の偉大なる精神の閃きが認めらるゝ。予は甲東の如き偉人を、我が日本が生じたるを誇りとする。（昭和二年五月初一午前六時十分、長興山莊に於て、時に旭日机案を射り、目眩せんとす。）

三　函山一周の記

五月初一午前八時、長興山莊を出づ、小田原の斤岡翁亦た一行に加はる。翁の家は元來小田原宿の本陣にて、翁は鄕土史の研究者の一人だ。

本日は昨日に比して、風あれども、先づ申分なき好天氣。予等は早川を溯り、塔の澤、宮の下を經て、宮城野、仙石原を過ぎ、遂ひに長尾峠の隧道を踰え、峠の茶屋に小憩した。隧道は神奈川縣、靜岡縣の分堺にて、兩側の風景は、互ひに全く別天地である。

神奈川縣側に立てば、函根の叢嶺と其の谿谷とを見、靜岡縣側に立てば、正面富嶽に對し、及び其の岳麓より、遠く甲信、駿遠の諸山を見る。予は長尾峠を以て、富士山觀賞の唯一と云はざるも、其の最善の地點の一であると云ふを憚らない。

此れは此度始めて感じたのではない、屢ば來りて屢ば感じたのだ。

雲煙は飛動しつゝある。富嶽は乍ち隱れ乍ち見え、半は掩はれ、半は露はれつゝある。風威帽を吹き飛ばさんとし、雲行甚だ急、實に倏忽變化、とても活動寫眞

の比ではない。觀賞良久して更らに峠を下り、漸く御殿場の東山莊を脚下に眺むる地點に至つた。偶ま雲霧全く排らき、富嶽は頂上より脚下迄、其の眞面目を發露し來つた。

途中には處々に山櫻や、大島櫻が咲き殘りてゐる。小米櫻は今が滿開である。鶯の聲は、告天子の音と相ひ和してゐる。新綠は扶疎として、既に初夏を報じてゐる。

危崖峭壁幾人家。　新樹蒼蒼石澗斜。
五月函山詩境好。　老鶯啼處見櫻花。

我等は踵を廻らし、更らに隧道を後戻りし。阪路を下りて、仙石原に至り、道を轉じて原上を横斷し、湖尻に向うた。一望の曠原、宛も輕井澤に似たり。之を閑却しつゝあるは、如何にも惜き心地がする。

我等は途中の燒原から、早蕨が拳を出しつゝあるを眺め、姑らく立ち留まりて、之を採つたが、やがて手巾に包みきれない程あつた。滿地皆な蕨と云はざるも、殆んどそれに幾かつた。

湖尻に至れば、一團の群集、何れも出船を待つてゐた。天候は稍や嶮惡、急風は雨を挾んで至らんとする徵を示した。されど先發者の發したる後、やがて風も和いだ。我等は湖岸に近く自動船にて航行した。湖岸には山躑躅が水に映じてゐる。湖山には一面馬醉木の花が咲いてゐる。而して雜木林の彼方此方には、櫻花が無頓着に咲いてゐる。我等は只だ舟行の速かなるを憾みとした。

箱根宿に上り、ホテルにて午餐し、片岡君の案内にて關址を見、興福院にて鎌倉時代の諸佛像を觀、堂々たる杉の並木ある磴道を攀ぢて、箱根神社に詣した。社域中、一塵なく、掃除洵とに行屆き、眞に清淨しき心地がした。早山宮司の心掛や嘉みす可し。

箱根神社は、伊豆山と共に、賴朝の最も信仰したる一にして、其の事實は東鑑

に特筆せられてゐる。然も今尙ほ縣社に過ぎない。寶物館には若干の古文書があつたが、之を詳視するの機會が無つた。

此から芦の湯を過ぎ、小涌谷から宮の下に至り、塔の澤を經、長興山莊に歸著したのは、午後三時。（昭和二年五月二日午前五時半、長興山莊に於て記す。今日の天氣如何。何れにしても歸られはならない。）

四　小田原城

五月二日、鳴泉の音にて目を醒ました。枕上一詩を得た。

修竹清泉隔二四隣一。閒花幽草自無レ塵。
飢來喫飯倦來睡。兩日替レ君爲二主人一。

長興山莊の留守番も、此迄御客は澤山あつたが、先生〔翠雲畵伯〕の留守を見澄ましての御客は、未曾有だと申してゐた。昨夜は我等を來訪したる、小田原の片岡翁も一泊したれば、お客のお客だ。

我等は名殘り惜しくも、午前八時長興山莊を辭し、片岡翁を東道として小田原に赴き、先づ小田原城址に上つた。震災は小田原を最も重く見舞うた。城の石垣は殆んど全く崩壞し、巨大なる老松は、根から拔けてゐる。然も本丸築地の上に立て展望すれば、流石に小田原が形勝の地であるとが判知る。而して北條氏時代、如何に其の規模が宏敞であつたことが判知る。

此の附近に北條氏時代の物と稱する七本松がある。何れも老松にて、何れがそれであるやは分明でない。但だ一方には函嶺を帶び、他方には相海を控へ、而して酒匂と早川とは、帶の如く、其の東西を環り、要害と云へば此に若くものはあるまい。謙信も、信玄も、各〻一たび城下に薄りたるが、遂ひに其志を逞うするを得なかつたのも、偶然ではあるまい。

天正十八年には、相手が猿面郎であり、而して天下の兵を動かして、半歲の攻圍の後、遂ひに開城に至つたのは、是非もなき次第だ。

但だ此の要害の爲めに、北條氏は概して要害を恃み、退守を主とし。武田信玄の如く、我が領地には、一寸たりとも敵を入れず、如何なる場合も、進攻を以て、戰略となしたるものと、其の趣を殊にしてゐた。然も其の子孫に至りては、武田、北條共に亡滅を免れなかつた。要するに武田氏の進攻戰略も、信玄ありての事。北條氏の退守戰略も、氏康ありての事。要は其の人の如何によるのみ。

我等は此れから二宮〔尊德〕神社に詣し、寧ろ其の壯大——比較的の語——に驚いた。御幸濱に赴き、海岸の風光を賞した。舊砲臺の跡と聞く。此邊は波高く、時としては丈餘の巨浪岸を呑み、直ちに人家に逼る虞れがあつた。竹添井々翁の如きも、曾て此厄に罹り、其の藏書の若干を漂失した。然も今や其の堤防工事完成したれば、其の心配はあるまい。

五　蓮上院と飯泉觀音

片岡翁は、我等を蓮上院に案内した。小田原記に、

元龜元年の秋の頃より、氏康御病氣にて、日々重らせ給ふ。箱根山、國府津護摩堂、花の木の蓮乘院にて、百座の御祈念あり。

とある。蓮上院が此だ。古文書數通ある。北條家の虎朱印の外、大久保忠隣などのもある。又た松原神社の別當西光院の古文書や、其の本尊の觀音、及び不動尊なども、併せて藏してゐる。

此れから田圃道を過ぎて、壽昌寺に至り、其の前なる田の中から掘り出したる古鐘を觀た。藤澤山淸淨光寺の銘があれば、藤澤寺の舊物であらう。其の龍頭の側に二個の口を穿つてゐるから推せば、或は朝鮮傳來ではあるまい乎と思はる。

此れから酒匂川を渡り、飯泉の觀音に詣した。

此の觀音は、坂東五番の札場にて、緣起を聞けば、弓削道鏡が野州の藥師寺に赴く途次、千代村に觀音堂を建て、後世靈夢に感じて、此處に移したと云ふ。

域內には巨大なる銀杏樹や、竹柏木がある。我等は本坊勝福寺に至り、元龜、天

正、慶長頃の制札やら、又た北條氏、德川氏の古文書を見た。此處の先住は、博識家と見え、蝙蝠老僧實應と稱し、飯泉觀音及び其の周邊に關する、二卷の由緣記が著はされてゐる。

住職峰君は、熊本女子師範學校長にして、宛も歸省中であり、其の岳父川添翁、其の師前記の蓮上院和尙、鄕土史家堤君抔相集りて、手打蕎麥の馳走に預り、秘佛觀世音を拜し、千代村に向うた。

蓮花草は滿開であり、桑葉は展びつゝある。藤は紫白の房を垂れてゐる。麥は既に黃ばんとしてゐる。田は鋤き返されつゝある。風は和かに吹き、告天子は空に高く囀りてゐる。此の田舍道を、時代離れのしたる人力車に搖られて往來するは、如何にも一興だ。

我等は千代村の忠魂碑畔に車を停め、姑らく此處彼處にて採拾した。此處が飯泉觀音の舊趾と稱せられてゐる。布目瓦片は山程あるが、紋樣とか文字とかを彫りたるものは、殆んど見出さなかつた。今や上府中府と稱し、字が千代村だ。片岡翁は此邊が、相模國府の所在地ではあるまい乎と云うてゐた。而して溝渠を廻らしたる一郭の地を指し、此れが國廳の趾ではあるまい乎と云うた。

我等は鴨宮停車場に至り、發車時刻前、此地の主なる物產に就て、驛長と相語つた。此驛から毎日五百噸內外の砂利を輸送すると云ふ。砂利も決して莫迦には出來ない。我等もせめて人間の砂利にてもなりたきものと、相顧みて一笑した。此れから片岡翁と相別れ、午後六時前、大森山王艸堂に歸著した。

此行往復三日、久振に生命の洗濯をした。單に長興山莊の不老泉に浴したるが爲めのみでない。一食、一睡、皆な適意ならざるはなかつた。客となるの秘訣は、主人の留守に限るとは云はぬが、時としては留守も亦た妙である。然も翠雲畵伯の如き、寬大なる主人の存在することを前提として。（昭和二年五月）

君言富岳低。
從レ此數百里。
君去過二其麓一。
低在二道樹端一。
中阻幾林巒。
立レ馬好仰看。

名山遊記終

昭和三年二月八日印刷
昭和三年二月十一日發行　初版　拾萬部

名山遊記　奥付
定價金五拾錢

著者　東京市京橋區日吉町　徳富猪一郎
發行兼印刷者　東京市京橋區日吉町　渡邊爲藏
印刷所　東京市京橋區日吉町　民友社
發行所　民友社
振替東京一三一〇〇

不許複製

民友社出版圖書目錄

東京市京橋區日吉町
振替東京一三一〇〇

蘇峰　德富猪一郎著

近世日本國民史

特色本領の一二

◆**歴史講究熱勃興**　自國を知れ、國史に返れとは蘇峰先生の警語だ。當今の社會に歴史講究熱が、蓊然として興つて來たのは、邦家前途の爲め慶賀に堪へぬ。これは『近世日本國民史』の刺戟の力、與つて大に居るとは、朝野識者が萬口一聲の批判である。

◆**獨闘創造の歴史**　近世日本國民史は、其の材料の精確詳密であるのみならず、成る可く前人の功を沒せざる爲めに其の史實を採用するのみならず、其の歴史的人物、若くは人物に關係ある權威者をして自ら語らしめてゐる。併し若し國民史が、單に古書の拔書と思ふものあらば、それは大なる見當違ひだ。國民史は著者の獨闘であり、創造である。

◆**胸中の一大樓閣**　著者は胸中に一大樓閣ありて、其の資料に古人を使用する迄で、この偉大なる國民史は、著者の匠心獨造である。而してこの大建築は、實に大正の御代を象徴す可き一大偉觀であるのみならず、帝國文献の有する曠古の一大産物である。

◆**特色は綜合大觀**　一室には一室の用があり、一階には一階の用がある。然も其の特色は、之を綜合大觀せねばならぬ。蘇峰先生の國民史、亦如此耳。併し國民史を以て、單に世の所謂る歴史と同一視するは、大なる間違だ。歴史は歴史だが、從來の歴史とは、全く其の本領、面目、趣向を異にしてゐる。眞に血の通つた活きた歴史だ。

◆**時代潮流の活描**　それは著者は一方に人を見、一方に勢を見。一方に心を見、一方に肉を見。一方に思想を見、一方に生活を見。而して兩者が社會を經緯して、時代の潮流に從て動く情態を描き且つ叙し、且つ論ずるからである。これ從來の史書に見る能はざる特徴の一だ。

◆**秩序的百科字彙**　されば國民史は、近世日本のあらゆる寶庫だ。政治でも、經濟でも、文學でも、宗教でも、美術でも、哲學でも、風俗でも、商業でも、工業でも、農業でも、世の中の森羅萬象、殆ど悉く其の大綱大要を襄括して漏らす所がない。されば國民史を以て、秩序的の近世日本百科字彙と云ふも妨げまい。

近世日本國民史

(1)	織田氏時代 前篇	本篇は近世日本國民史の最源頭をなすもので、筆を室町幕府の末期に起し、其の衰亡に止む。眞に信長の覇業創始時代の記錄也。
(2)	織田氏時代 中篇	本篇は信長が、鋭意努力の時代を叙述したるもので、長篠戰爭を始め、安土城の經營、毛利氏との關係、丹波方面の手入れ等に至る。
(3)	織田氏時代 後篇	本篇は信長が最活動最得意の時代を叙述したもので、武田氏の滅亡、信長父子の死等を描き、最後に信長の全體を顯現したるもの。
(4)	豐臣氏時代 甲篇	本篇は秀吉の素生出身に筆を起し、後織田氏時代に接續して、秀吉の創業時代を叙述したもので、一代の英雄秀吉の立志傳なり。
(5)	豐臣氏時代 乙篇	本篇は秀吉が五十一歳から、五十三歳に至る最も油の乘りたる期間の記錄で、秀吉の生涯中最得意の時代である。
(6)	豐臣氏時代 丙篇	本篇は秀吉時代の落著を示し、北條氏退治を骨子として、東北の平定、家康の移封の他に、我使節の羅馬入りに及ぶ。
(7)	豐臣氏時代丁篇 朝鮮役 上卷	本篇は著者が最も精力を傾注し、大和民族の海外葛藤より、秀吉の外征、行長の平壌入り、其他日本軍制海權の失墜に終る。

上製　菊判　定價　各五圓　送料　各十八錢
並製　四六判　定價　各三圓　送料　各十二錢

近世日本國民史

(8) 豐臣氏時代戊篇 朝鮮役 中卷

本篇は朝鮮役に於ける日明外交史にして、朝鮮が明の救援を請ふに始まり、明の神宗皇帝が秀吉を日本國王に封するに終る。

(9) 豐臣氏時代己篇 朝鮮役 下卷

本篇は朝鮮役の總勘定にして、講和評定の經緯より秀吉の死と日本軍の總撤退に至り、關白秀次の破滅秀頼の成立を叙す。

(10) 豐臣氏時代庚篇 桃山時代概觀

本篇は日本歴史に磨滅すべからざる華麗絢爛たる文化の一時期を劃した、桃山時代の多趣多様、各種各方面に亙る特色、概觀を描く。

(11) 家康時代上卷 關原役

本篇は秀吉死後の形勢より、關原一戰に於て石田三成が家康と雌雄を決せんとして、如何に震天動地の活劇を演じたかを叙す。

(12) 家康時代中卷 大阪役

本篇は天下の名實德川氏に歸し、遂に大阪冬陣夏陣の開始となり大阪城陷り豐臣氏全く亡ぶるの狀を叙したる哀史なり。

(13) 家康時代下卷 家康時代概觀

本篇は家康の人物と、其の一生の事功とを精密に叙述したもので、德川幕府施政の根本義に始り、家康の臨終に至るまでを記述す。

(14) 德川幕府上期上卷 鎖國篇

本篇は鎖國政策に關聯した内外一切の由來事を、豐富なる材料と精嚴なる史筆とに因りて叙述したもので、島原役の顚末等をも記述す。

上製 菊判 定價各五圓 送料各十八錢
並製 四六判 定價各三圓 送料各十二錢

近世日本國民史

(15) 德川幕府上期中卷 統制篇

本篇は、幕府對朝廷關係の記述で、朝幕衝突を始め、諸大名改易、親藩連枝處置の顚末の如き、最も幕府の醜惡を抉出す。

(16) 德川幕府上期下卷 思想篇

本篇は尊王及び國體の思想の胚胎と、發達の來歴を記述し、殊に水戸光圀に關しては特筆大書し、由比正雪事件に及ぶ。

(17) 元祿時代上卷 政治篇

本篇は幕府の政治を記述すると共に、綱吉公、桂昌院、堀田、柳澤等の人物を批判し、時の後光明天皇の御事をも記載す。

(18) 元祿時代中卷 義士篇

本篇は赤穗義擧事件の記述で、單に興味中心を目的とせず、其の原因を究め、世論を批判し獨特の觀察の下に成る眞の義士觀なり。

(19) 元祿時代下卷 世相篇

本篇は元祿時代各方面の代表的人物と、業蹟を記し、瑞賢、奈良茂、辰五郎等の實業家や、西鶴、近松、芭蕉、狩野、英、等を擧ぐ。

(20) 元祿享保中間時代 元祿享保中間時代

本篇は家宣、家繼時代に、新井白石が如何に活躍したかを精叙し、羅馬人シドッチの渡來、江島事件等を特筆して概觀に及ぶ。

(21) 吉宗時代 吉宗時代

本篇は將軍政治中興の一時期たる吉宗時代の施設萬般を縱横に叙述し、吉宗の人物は勿論、更に文敎發達の方面をも特筆した。

(上製)價送 五、〇〇
(並製)價送 二、五〇 一、八〇

上製 菊判 定價各五圓 送料各十八錢
並製 四六判 定價各三圓 送料各十二錢

近世日本國民史

(22) 寶曆明和篇
本篇は桃園天皇を中心としたる、攝家對平ら公家の葛藤、竹内式部、山縣大貳の二大事件を詳述し、幕府倒壞の因を說く。

(23) 田沼時代
本篇は田沼時代に向つて嚴正なる批判を下し、田沼意次の人物を詳細に解剖し、蘭學興隆を物語り、上杉鷹山の劇的場面に及ぶ。

(24) 松平定信時代
本篇は時の老中松平定信を中心として當時の諸相を評述批判し、就中光格天皇の尊號宣下事件を解剖論評した點本書特獨。

(25) 幕府分解接近時代
本書は德川十一代將軍家齊時代、幕府の崩壞する勢を解き、外國船の接近に國防論尊王攘夷論の湧出を述べる。

(26) 雄藩篇
本書は德川末期に於ける諸藩の形勢を論じ、殊に薩摩、長州、水戸の三大雄藩を論評す、蓋し此の三雄藩は維新に最も活躍せるもの。

(27) 文政天保時代

(28) 天保改革篇

二月下旬刊行

續刊

上製菊判定價各五圓・送料各十八錢
並製四六判定價各二圓五十錢・送料各十二錢

紀元節發刊

蘇峰叢書

二月十一日は日本帝國建立の日だ。此の日出度き日に本叢書を發刊する。蓋し、本叢書は蘇峰學人の最近十數年に於ける文筆生活を代表する金字塔である。紀元節に第一册「皇室と國民」第二册「名山遊記」を出版し爾後毎月一册の割合にて續刊する。その種目は天然、政治、文學、宗教、美術、風俗、その他凡そ人間生活に觸れるもの總てに亘つてゐる。本叢書は正に大正、昭和の日本を表象する活時代史である。

四六判二五〇頁內外
毎册定價五拾錢
送料毎册八錢

第一册 皇室と國民
第二册 名山遊記
第三册 國民と政治
三月發賣

西郷南洲先生
本書は維新の偉傑中、現代に於ても最も一般民衆に欽慕さるゝ西郷南洲先生の人物とその事業とを論評せしものなり。
四六判 定價六拾錢 送料四錢

大久保甲東先生
蘇峰 徳富猪一郎著
本書は維新の偉傑甲東先生に對する世人の誤解を一掃し、先生の眞の力量、手腕、人物及びその事業とを評論す。
四六版五百餘頁 定價貳圓 送料十二錢

南洲先生遺墨集
財團法人 青山會館編纂
一卷を開かば天挺の大人豪の風丰眼前に躍出し、無限の大教訓を享受し得べく現下風敎興德の源泉である。
百三十點 定價拾五圓 送料一圓

甲東先生遺墨集
本集は南洲先生遺墨集と共に日月の如く幷び懸けて靑史を照破し、四海忠義の心を振起するの一大寶訓なるを疑はず。
百六十點 定價拾五圓 送料一圓

蘇峰　德富猪一郎著

國民小訓
天覽台覽　久邇大宮殿下より本書嘉稱の玉詠漢詩御下賜
附錄＝涵情養氣集
忠君愛國の護符、憲政教義の絶好讀本、眞に國民醒覺の教訓書。附錄に和歌八十首、漢詩九十絕を收む。孰れも國民の志氣を振作するの隨一資糧。日夕諷誦の絕好伴侶。
（文部省認定）
菊判並製　二四〇頁　定價八拾錢　送料八錢

縮刷國民小訓
「國民小訓」愛讀者諸氏の熱誠なる御要求に應じ、携帶に便にして而かも瀟洒なる縮刷版。
改訂（文部省認定）
菊判並製　定價五拾錢　送料六錢

家庭小訓
家庭に於ける實用的心得を示したもので家庭や女學校に備ふべき書。
改訂（文部省認定）
菊判並製　定價五拾錢　送料六錢

處世小訓
如何にして世に處すべきかを平易に說いたもので、實に出世の好指針。
菊判並製　定價五拾錢　送料六錢

昭和一新論
本書は「國民小訓」の姉妹篇として昭和御代劈頭に著はされし物。過現未を達觀しよく宇內の趨勢を洞察しての立言なり。
菊判　定價六拾錢　送料八錢

民友社編輯部編纂

國民小訓字解
何れも出來るだけ精確丁寧に字解を附し、著者述作の精神の諒解に努む。
定價參拾錢　送料四錢

家庭小訓字解
定價貳拾五錢　送料二錢

處世小訓字解
定價貳拾五錢　送料二錢

蘇峰　德富猪一郎著

大正の青年と帝國の前途
日本帝國の使命遂行と、國民の覺悟とに就て、大正の青年の精神元氣を、鼓舞作興した國運興隆の指針盤。
三六判上製　定價貳圓　送料十二錢

時務一家言（改版）
蘇峰先生の思想經綸の大經大綱を說示した書で、其生命を打込み、熱血を注ぎたる述作言論の精粹。
四六判上製　定價貳圓　送料十二錢

大和民族の醒覺
日米問題に關して、蘇峰先生が幾多の醒覺を力說された警告書で、同胞諸君の自奮を促がす必讀書。
四六判上製　定價貳圓　送料十錢

三十七八年役と外交
日本國民の血を湧かした、三十七八年役の外交機密を、當時崇議に參與した著者が公平に批判し、赤裸に暴露した世界的奇書。
四六判上製　定價壹圓　送料八錢

精神の復興（蘇峰文抜萃）
如何にして國民的精神を興隆し、實力を養成すべきかを啓示した、愛國的熱誠の溢れたる精神復興の指針。
四六判並製　定價貳圓五拾錢　送料十二錢

政界の革新
清浦內閣を中心として一世を震駭したもので政界の革新を絕叫した活文字。
菊半　定價五拾錢　送料四錢

吉田松陰（改版）
維新改革時代の代表的人物たる松陰の眞傳として、唯一なる獨特の權威を有す。青年諸君の一讀を待つ。
四六判上製　寫眞筆跡入　定價貳圓五拾錢　送料十二錢

靜思餘錄（改版）
蘇峰先生の興味饒き勝遊の產、多彩なる名精神的結晶品で、最も用筆の韻致に饒み感興不盡の名著。
三六判上製　定價貳圓　送料八錢

烟霞勝遊記（還曆記念出版）上卷　下卷（品切）
蘇峰先生の廿五歲より卅二歲に至る時代の勝記、又胸底湧出の印象記で、足跡北海道より滿鮮に連る。感興不盡、紀行文の隨一、旅行の好伴侶。
風景人物寫眞二百餘入　定價參圓五拾錢　送料十二錢

蘇峰　德富猪一郎著

蘇峰隨筆

先生の學問、識見、趣味、修養、好尚、即ち全人格が最も鮮明に發揮せられたもの。自然、人事、群籍、思索の隨感隨錄、風趣橫溢。

四六判上製　定價貳圓五拾錢　送料十錢

第二蘇峰隨筆

概れ震災後の起稿で、從つて記述眞劍味多く、讀者の感興を惹くこと深し。其の孰れにも先生獨特の觀察識見あり。隨筆の絕好。

四六判上製　定價貳圓五拾錢　送料十錢

第一人物隨錄

獨特の眼孔筆致を以て、東西古今の人物を捉へ來りて、能く其の眞を傳ふ。著者が『書くことを禁じ得ざる刹那に於て書いた』ところに本書の眞價がある。

四六判上製　定價貳圓五拾錢　送料十錢

野史亭獨語

本書は蘇峰先生が湘南逗子の野史亭に於て、修史の餘課產み出したる隨感隨筆六十四題を收む。其の題目內容の豐富なる、記述の精明淨潔なる、讀者叩くに從ひて、大小の響之れに應ずるの妙がある。

四六判上製　定價貳圓　送料十錢

賴山陽

賴山陽は著者幼少の頃から、愛好傾倒した人物の一だ。本書は三十餘年の間博搜した資料と研究した識見とを以て、大處より大觀したる力作。山陽の全面目躍如。

菊判上製　定價四圓八拾錢　送料十八錢

德富猪一郎　木崎愛吉　光吉元次郎　共編

賴山陽書翰集（上下）

本書は弘く江湖の所藏を探求して得たるものを、嚴密なる考證研究の下に、年代順に分類編纂したるもの。自ら山陽自叙傳を大成したる空前の產物。

菊判上製　一八〇〇頁　定價拾八圓　送料五十四錢

故櫻痴居士　福地源一郎著　蘇峰學人序

改版　幕府衰亡論

本書は幕府衰亡の因由、歸結を詳論して、必讀の價値ある名著。觀察正鵠、意見公正、論斷穩當、而して平明、淡泊、然も情と理と勢とを揣摩して要領を得たるところ無比。

四六判並製　定價壹圓五拾錢　送料十錢

井上雅二著　蘇峰學人序

西半球を巡りて

著者は世界を家として、足跡渾球に普し。本書は南北中米十二ケ國、三萬七千餘哩の視察歷遊の記。山川風物を活寫し、海外發展國策の經綸を絕說する快著。

菊判地圖寫眞十數葉入　定價參圓五拾錢　送料十八錢

大谷光瑞師著

新刊　無題錄

第一編、第二編、第三編

第一、第二編各價八拾錢　第三編　價八拾五錢　送料（各）二錢

新鑿上人の胸中燦たる光明に滿つ極樂の莊嚴を科學的に表現したるものは即ち本書である。

四六判　定價貳圓　送料八錢

極樂莊嚴

師一流の獨特の紀行感想隨筆等を收むること廿有餘篇、何れも多彩豐潤、津々たる興味盡きざる新集を見よ。

四六判　定價貳圓　送料十錢

濯足堂漫筆

孫子の本領は外交經世の眞髓を說くにある。是れを有して國家榮え、是れを讀みて國民昂る。蓋し人生の好指針である。

三六版　定價壹圓　送料六錢

孫子新註

西方淨土の本願は此の經典より流出す。本書は光瑞貌下の詳釋本にして、その博學と懇切とは正に賢師慈父の感あり。

四六判　定價壹圓　送料六錢

佛說阿彌陀經講話

光瑞師の多年の研究に依て成れる書。其の該博の蘊蓄を傾倒した後完成されたものだけに、渾然之を融一してゐる。

四六判　定價七拾五錢　送料四錢

般若心經講話

本書は師が博大なる科學的智識を傾倒し佛敎の原理を解釋闡明したもので、一讀以て其の深甚微妙の眞理に到達す。

四六判　定價壹圓五拾錢　送料六錢

佛敎の原理

本書は光瑞師の著書中に於て最も光彩陸離たるものにして、玄幽を極めたる佛敎の眞諦を說く獅子吼なり。

四六判　定價壹圓貳拾錢　送料六錢

第一義諦

本書は大師の裔孫たる光瑞師が大師の信仰と人格とを詳述されたるものにして、大師の面目躍如たるものがある。

菊判和製　定價參圓　送料十二錢

眞見大師

國民パンフレツト

國民新聞編輯局編

國政　國民新聞社編

普通選擧早わかり

普通選擧の內容を平易に、親切に說明したもので參考資料をも收めた類書中の覇王なり。

小形美本　定價參拾錢　送料二錢

國民新聞編輯局編

普選ポスターと新戰術

現代はポスターの時代なり。ポスターは直接簡。明なる武器。本書は各國と我國各政黨のポスターと普選常識手引を備ふ。

四六判　定價四拾錢　送料六錢

國民新聞編輯局編

地方普選早わかり
——府縣會議員選擧の心得——

本書は府縣會議員普選の常識、及びそれに必樞なる法文を收めしもの。「普選ポスター」と新戰術」の姉妹篇。

四六判　定價參拾錢　送料四錢

國民新聞經濟部編

街頭經濟

本書は日常誰人でも見聞する物に就て平易に經濟的立場より詳述する。例へば「虫寶り」「花寶り」「ブロカーガー」の如し。

四六判　定價五拾錢　送料四錢

伊藤龜雄著

歐洲の獨裁政治

本書は大戰後に於ける歐洲諸國が如何に獨裁政治に傾いてゐるかを論述したるものなり。

井口一郎著

我國の無產政黨

本書は近來我國に現はれ、殊に普選後は興味の中心ともなるべき無產政黨の生立を述べしもの。近代人必讀の書なり。

地租委讓問題論戰
——武藤金吉、菅原通敬兩氏——

地租委讓問題は財政經濟上の問題たるのみならず、今や我國政治問題中にても重要なる問題となつた。本書は朝野を代表する二氏の論戰なり。

公爵　近衞文麿述

貴族院改革と現制度の運用

今や貴族院は益々民衆と離れ行く感あり。この時に當り甲冑の新人近衞文麿公の貴革の叫びや、眞にわが意を得たものでなければならぬ。

經濟學博士　阿部賢一著

生活問題と經濟思想

本書は難かしい經濟學を斯くも平易に斯くも丁寧に述べたるもの。實に世人の生活を洞察せる博士の優しき指導書である。

各　四六判　定價　四拾錢　送料　六錢

四定送　六貳拾錢　貳拾錢　判錢　四錢

蘆花　德富健次郎著

改版

自然と人生

萬人の胸に徹する魅力ある本書は、實に現今に至るまで、其の需要は出版界の記錄を破る。精彩ある自然と人生のスケツチを見よ。

菊半截並製　定價六拾錢　送料四錢

改版　小說

不如歸

讀書界の視聽を集めた本書は、津々浦々にまで知られた武男と、浪子を中心とした悲愴な物語で、何人も一度は手にすべき不朽の名篇。

四六判美本　定價壹圓　送料八錢

改版　小說

思出の記

著者の初期の傑作で、主人公の幼時よりの運命の曲折と、生存の惱みと、戀愛の歡喜と、結婚の幸福を描いた長編小說。

三布裝　六判美本　定價貳圓　送料八錢

改版

名婦鑑

本書を一度繙けば世界古今の名婦を一堂に聚めて相語るの思ひがある。古の名婦の跡をたづれば現今の名婦の事業と人物を知る。女性そのもの、眞價を知ることである。

四六判美本　定價壹圓　送料六錢

農村問題四名著

農學博士　小野武夫著

村の辻を往く

本書は各方面より見たる農村生活の改善等を實際の例を擧げて、極めて面白く平易に論述したる近來の快著。

四六判並製　定價六拾錢　送料四錢

農學博士　中島九郎述

現時の農村問題

米國問題、小作爭議、農村生活の改善等、其他農村に於ける現代の政治、經濟、社會上多くの問題を實際より研究した良書。

四六判並製　定價六拾錢　送料四錢

フオート博士原著　水野常吉譯

丁抹の農村と其の教育

世界的唯一の模範たる丁抹の農村と教育とを說ける農村問題解決の鍵にして、國富增進の典型を明示したる利用厚生の好指針。

四六判美本　定價貳圓　送料八錢

フオート博士述

農村問題講演

斯界の世界的權威者たる博士が、先年來朝の際、我が農村問題の解決に一大刺戟を與へられたる農村及び教育問題の講演集。

四六判並製　定價八拾錢　送料六錢

正岡子規監修

新俳句

明治類題の句集で、題目の豐富、句數の多饒なることを特色とせる斯界の良書。子規居士の監修に高き識見を覗ふべし。

四六判美本 定價壹圓 送料八錢

文學博士 澤柳政太郎編

國民教育奬勵會編

現代文化と教育

故厨川博士、深田博士、阿部帝大教授、菅原博士、上野帝大講師、澤柳博士、入澤帝大教授等の文化教育の講演集にして、絶好の必讀書。

四六判 定價壹圓五拾錢 送料八錢

修身科

師範大學講座第一輯

本會新設講座の第一回講演筆記である。理論と實際の兩方面から説いた修身科の研究。教育者諸君補習用の絶好書。

菊判二三八頁 定價八拾錢 送料八錢

宗教科

師範大學講座第二輯

神教、佛教、基督教、儒教即ち世界四大宗教の眞髓を四大家が最も短的、而かも平易に叙したるもの。今まで求めて得られざりし書。

菊判三〇〇頁 定價壹圓 送料八錢

英國 バイウオーター原著 堀敏一譯述

現代教育の警鐘

日米關係未來記

本書は我國唯一の實際教育の研究學校たる所の成城小學校の苦心經營と十ケ年努力とを披瀝せしもの。天下教育改造の警鐘である。

菊判 定價壹圓八拾錢 送料十二錢

太平洋戰爭

日米將來の謎を解き、且つ語る稀有の快書にして、日米の將來を知らんと欲するものは是非一讀あれ。

四六判 定價壹圓 送料六錢

下位春吉述

フアツシヨ運動

伊太利國民運動に參加した著者の講演筆記で愛國運動振りが如何に躍如たるかを見よ。

菊判半截 定價五拾錢 送料四錢

鶴友會編

奮鬪實傳

大倉鶴彥翁

實業界の大立物として、一世の快男兒たる翁が、裸一貫から今日の大成功をした絶好の立志篇。

菊判上製 天金美本 定價參圓五拾錢 送料十八錢

駒澤裁縫學院長 坂井光子

家庭向物尺型紙いらず坂井式洋服裁縫

（小供婦人服の卷）

一讀すれば直ぐ小供服婦人服が誰れにでも出來る重寶な書

菊判美本 定價貳圓五拾錢 送料十二錢

566
39

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black